

研究活動報告

WHO/SEARO 健康的な高齢化に関する専門家会合

2021年8月10日(火)・11日(水)、オンラインにて、世界保健機関(WHO)東南アジア地域事務局(SEARO)が、第一回健康的な高齢化に関する東南アジア地域専門家会合(First SEAR Expert Panel Meeting on Healthy Ageing)を開催し、筆者も参加した。会合は地域事務局ニーナ・ライナ氏の挨拶で開会され、世界保健機関執行理事である中谷比呂樹教授を座長に、世界、WHO 東南アジア地域の高齢化の現状、ICOPE(高齢者のための統合ケア)をはじめとした介護システム、新型コロナウイルス感染症の高齢者ケアの影響について、情報共有と協議が行われた。

昨年8月に世界保健総会、12月に国連総会で、「健康的な高齢化の10年」決議案が採択され、その行動計画を通じて世界全体での健康的な高齢化が推進されることとなった。おりしも2022年はマドリッド高齢者問題世界会議から20年目にあたり、高齢化に関するマドリッド国際行動計画が各国で実施され、健康的で活動的な高齢化が推進されているかSDGs指標を活用しながら評価されることとなっている。日本も世界で一番高齢者割合が高い国として、また介護保険制度などを通じた高齢者介護システム先進国として、その動向について各国からの関心は高い。ウイズコロナの中、どのように健康的な高齢化を推進するのか、各国の協調が進んでいる。(林 玲子 記)

第34回国際地理会議

第34回国際地理会議(34th International Geographical Congress)は2021年8月16日(月)から20日(金)にかけてオンライン上で開催された。当初はトルコのイスタンブールで開催を予定していたが、世界的なCOVID-19の蔓延状況に鑑みてオンライン開催に変更となった。本年の大会では117のオーラルセッションと、89のポスターセッション、7の基調講演が催され、このうち11セッションがCOVID-19に関するものであった。なお、著者は“Future Prospects of Population Aging in Japan: A Cluster Analysis Using Small Area Population Projection Data”と題し研究報告を行った。次回大会(35th International Geographical Congress)は2024年の8月25日(日)から30日(金)にかけてアイルランドのダブリンで開催予定である。詳細についてはIGC2024の公式サイト(<http://igc2024dublin.org/>)を参照されたい。(井上 希 記)

第31回日本家族社会学会大会

第31回日本家族社会学会大会は、2021年9月4日(土)~9月5日(日)の日程で開催された。当初、開催校である九州大学(福岡市・伊都キャンパス)での対面開催も検討されたが、新型コロナウイルス(COVID-19)第4波の感染拡大を受けて、前回大会と同様にオンラインで実施されることになった。

今大会では、自由口頭報告が39本と前回大会(33本)よりも多く、例年通り「出生・少子化」および「結婚・非婚」のセッションも開かれた。新たな部会として「コロナ禍と家族」も設けられ、新型

コロナウィルス感染拡大前後における生活水準・子育て世帯の就業・世帯内分業の変化などについて量的／質的データの分析結果が報告された。テーマセッションは、日本家族社会学会が2019年1月～4月に実施した「全国家族調査 (NFRJ18)」およびその後続調査である「NFRJ18質的調査」の成果報告、そして育児ネットワークの構造と地域性に関する3つの部会があった。また、大会1日目の昼には、池岡義孝会長（早稲田大学）による日本家族社会学の定礎者である戸田貞三の戦前の研究軌跡をテーマとした会長講演も行われた。

2日目午後には、「『パブリック／プライベート』空間の重なりと家族・ワークライフバランス：『職住分離の不明瞭化』の影響を考えるために」と題する公開シンポジウムが開催された。①在宅勤務とワーク・ライフ・バランスの関連、②小規模家族経営（自営業）における女性の働き方から得られる示唆、③生活時間調査を用いた公的／私的領域の検討という分析視角から、新型コロナウイルスを契機とした在宅勤務・リモート・ワーク等の普及が職業・家族生活に及ぼす影響について議論が展開された。

当研究所からは、岩澤美帆（人口動向研究部・部長）、釜野さおり（同・室長）、藤間公太（社会保障応用分析研究部・室長）が部会司会を務め、「出生・少子化」部会にて守泉理恵（人口動向研究部・室長）と中村真理子（情報調査分析部・研究員）が、テーマセッションにて齊藤知洋（社会保障基礎理論研究部・研究員）がそれぞれ口頭報告を行った。（齊藤知洋 記）

「2021年度日本数理生物学会年会」2021年（宮崎大学主催 web 開催）

2021年9月13日～同年9月15日に宮崎大学主催で web 開催された「2021年度日本数理生物学会年会」に参加した。この会は筆者が所属する日本数理生物学会の年会である。昨年に引き続きコロナ禍のため、web による開催となった。普段この学会は数理モデルを中心とした生態学、人口学、疫学、進化論、また最近では分子生物学を対象とした生物学関連のテーマセッションが軒を連ねている。しかし、昨年からは世界中で猛威を振るっている新型コロナウイルス感染症いわゆる covid-19への関心から感染症関連のテーマセッションが多く、研究者達の注目を集めていた。筆者は「繁殖価と最適生活史スケジュール問題」というタイトルで生活史の進化とその人口動態を制御理論の解説を交えて最新の研究結果を報告した。

個体群動態の方程式から制御方程式が導けるという内容だったが、関心を持って頂いた参加者から有意義な質問とご議論を頂くことが出来た。昨年からは懇親会が web で開催されるようになったが、ソフトウェアの環境や個々の web 環境の違いから参加申し込みの数に比べて、実際の参加者の数が少ないことが今年も確認された。Web 上において従来の学会と同様の雰囲気作りを行う為にはまだ多くの課題が残されていると感じた。一刻も早く新型コロナウイルス感染症の収束を願うばかりである。（大泉 嶺 記）

2021年日本地理学会秋季学術大会

2021年日本地理学会秋季学術大会は、地域地理科学会と共催で岡山大学をホスト校とし、オンライン形式で2021年9月18日（土）～9月20日（月）に開催された。以下に人口関係の発表タイトルを記す。17日には台風14号が史上初めて福岡県福津市付近に上陸し、通常の大規模大会形式であれば大きな混乱となるところであったが、オンライン形式により大きな影響もなく開かれた。人口関係の発表では参